

おべんとうとい

命を重く受け止め、当たり前ではない毎日を精一杯生きる

行ってきます

一九四五年八月六日広島に原爆が落とされた。約一四万人が亡くなり、大きな被害を受けた。爆弾が落ちた瞬間中心付近では約三千度から四千度の高温となった。



県立広島第二中学校一年生の折免^{おりめんしげ}滋さん(当時十三歳)は、建物疎開の作業現場で被爆し、亡くなった。この弁当箱と水筒は、骨になった滋さんの遺体を母親が見つけた時、遺体の下にあったものだ。

お弁当の中身は、米・麦・大豆の混合ごはんと油炒め。滋さんはお弁当を楽しみに出かけたが、それを食べることはできなかった。

行ってきますとは？

行ってきますは、正しくは「行って来ます」と書き、「行きます(が、必ず帰って)来ます」という言葉を省略したものだ。このように「行ってきます」という言葉は、再会を願う気持ちとともに、今一緒にいられることの大切さをも私たちに教えてくれるのだ。



「痛いよー、苦しいよー」
「熱い！水を！」
「助けてー！お母さんー」
「死にたくない……」
「どうしてこんな目に……」
「あの子はどこに……」
「助けてあげられなくてごめん……」
「亡くなった人、残された人」
一人ひとりに心の底からの叫びがあった。

平和新聞

原爆の恐ろしさ

私たちが広島に行つて学んできたものの中に広島平和記念資料館で見た、溶けた金属の塊があった。一般的に鉄が溶ける温度が一五〇〇度といわれているのだが、原爆投下直後の広島には三〇〇〇度から四〇〇〇度の熱があったとされている。その背景には原爆によって起きた熱線が深く関わっており、原爆投下直後の熱線はガラスを溶かし変形させて、



人々の皮膚を焼いて皮膚同士をくっつけてしまうほど猛威をふるっていた。この影響により唇がくっついてしまい話すことが困難になってしまった人もいるという。このことからあの日あの場にいた人たちは想像もできないような熱い熱線を浴び、水を欲しながら死んでいってしまったということがわかった。実際に広島にあった川には人々の遺体がゴロゴロと転がっていてまさに地獄絵面であったと記されている。

罪のない子供の命

語り部の近藤さんは佐々木貞子さんについて語った。佐々木さんは二歳の時に被爆した後、小学六年生の時に白血病と診断された。余命は持つて一年だと宣告されたのだ。佐々木さんはつらい入院生活の中病気を治したい、生きてみんなと学校へ通いたいという思いから、一ヶ月で千羽以上の鶴を折った。

だが、その願いが叶うことはなく佐々木さんは十二歳という若さでこの世を去った。この話から原爆は原爆の威力だけでなく、原爆により大量に放射線を浴びその影響で後々、今回は白血病などが引き起こされるということがわかった。(実際に、一九五〇年から一九五三年の間の白血病患者には被爆していない人たちがより被爆者の方が割合が高い。)

平和への道

広島に行く前に私たちは小学校六年生、中学校二・三年生、と三年間歴史を学び、事前学習でも原爆の被害について学び、過去に何万何億と命が亡くなった事実を私たちは理解していると思っていた。しかし、被爆された近藤さんの話を聞いたり、平和記念資料館で被爆直後の写真や絵をみたり、ボランティアの方の話を聞いたりするうちに、過去に信じたくないようなことが起こり、大量の命が失われた

過去を目の当たりにするうちに、過去の悲惨な事実を変えられないことに悔やみ、変えられるのは現在と未来しかないことを学んだ。戦争は思いやりを持たず権力のある者が弱い者を使い、自分の思い描く世界を実現させるための手段なのではないだろうか。そしてこの日本は平和が常にあるように思えるが

常に危機に晒されているのだと思う。私たちはその平和を脅かすものから守るために、過去の悲しき戦争を繰り返さないよう、常に思いやりを持って行動する必要があるだろう。「思いやり」それは日々の生活の中で生まれ、少しずつ育って行くものだろう。普段から周りの人へ挨拶、常に感謝の気持ちを持つことも平和への一歩なのだと思う。

私たちにできること

残念ながら今も世界に核がたくさんある。なぜ広島での悲劇があったのにも関わらず、人々は過去の教訓を活かせないのだろうか。それは、過去の悲惨な出来事を他人事に捉えることから始まり、また同じ出来事を繰り返してしまふことに繋がってしまう。

原爆についてをあまり知らない他国は核を持つことが国の安全だと信じている。そんな思いが「核の抑止力」となり、世界から核がなくならないひとつの理由といえるだろう。それは、他国だけではない。

だからこそ、私たちは原爆についてや被害にあった方々の思いを後世に語り継ぎ、二度と同じ出来事を繰り返させない必要がある。それが、今の私たちにできることなのではないだろうか。



News peace

真っ黒のお弁当箱

いつも食べているお弁当の
中身が灰になると言われたら
どう感じるだろうか。
広島に原爆が落とされた八
月六日、当時中学一年生の男
の子の命はお母さんにとって
もらったお弁当と共に原爆に
よって奪われた。

入っていた。
その子はお弁当を食べる
ことを楽しみにしていた
が、工場で仕事をしている
際に爆心地から600mで
被爆し亡くなった。このお
弁当箱は彼の遺体を母親が
見つけ出した時遺体の下に
あったものである。



最後の言葉

みなさんは「行ってき
ます」が家族との最後の
会話になると考えた事は
あるだろうか。
八月六日の朝、いつも
のように「行ってきま
す」と家を出てそのまま
被爆した人がいる。その

人はそれきり、家
族と会うのは最後
だった。
他にも、いつも
通りに近所で話し
たり遊んだりして
いた人がおり原爆
が落とされること
など全く想像して
いなかった。

何気ない日常の幸せ

今までは他人
事に考えていた
が、実際に原爆
が落とされた地
に足を踏み入れ
て、当たり前
の明日は保証され
ておらず、私達
が今過ごしてい
る何気ない日常
が、どれだけか
けがえのない幸
せなものなのか
を、改めて痛感

した。
だからこそ、
私たちは一日一
日を大切にしてい
きたい。



私達から小学生へ

今も原爆資料
館本館の周りで
進む発掘で、被
爆当時の遺構と
ともに暮らしの
品々が続々と出
土している。
私たち中学三
年生は九月に近
藤紘子さんから

直接話を聞き、最
後に近藤さんが言
われた「みんなが
これから平和をつ
ないで平和な世界
が続くことを願っ
ています。頼ん
だよ」という言葉を
大切に今を過ごし
ている。

だから、私たち
だけでなく次の
世代である皆さ
んにも原爆のこ
とをこれからも
過去のことにせ
ず、家族や友達
といれる一日一
日を大切に過ご
してほしい。

平和ボート

慰霊碑

ひとつの原爆で約34万個の命が奪われた

広島にある平和記念公園には、二十個を超える慰霊碑がある。中でも最も知られているのは原爆死没者慰霊碑である。この慰霊碑には二〇二四年八月六日時点でわかっている、原爆で亡

くなった三十四万四三〇六人の名前が原爆死没者名簿に書かれ、原爆慰霊碑に納められている。さらに石棺には「安らかに眠ってください 同じ過ちは繰返しませぬ

から」と刻まれている。他にも広島県立広島第二中学校慰霊碑や韓国人慰霊碑など数多くの慰霊碑があり、原爆の被害の大きさを表している。

NOと言える世界へ

ピースボランティアの上野さんは慰霊碑に着く度に繰り返し、核の使用や戦争について「全員がNOと言えれば済む」と言っていた。

これが言えないとはどのような状況なのかというとき、身勝手なことをする人がいたり、誰かが大きな我慢をし、不平等からくるものだ。そしてひとつの慰霊碑の前で、人々が原爆によって無差別に殺された事実

えなかったがために起こったのだということ、NOと言えらるることの大切さも教わった。そして自分の意見をしっかりと伝えていくことが平和にも繋がると感じた。



写真：韓国人原爆犠牲者慰霊碑

私たちが実際に広島を訪れ、話を聞き、感じたことはどれだけインターネット

トや教科書で学んでも現地ではか学べないことが多く、被曝した展示物や写真

を見ることが一番学びになるということだ。

これから私たちができること

今の私たちが将来できることは語り継いでいくことだ。実際に体験したことがあろうかという地球からいなくなるときに、戦争のとき、広島や長崎で起きた悲惨な出来事を体験したことがない私たちが語り継がな

ければ、これから先の世代に伝わることなく、いつかは忘れられてしまわれてしまふかもしれない。そうすればまた同じ悲劇が繰り返される。もう二度と同じことを繰り返さないためには、私達

が戦争のことや広島のことをずっと後の世代に残していくことがとても大切だ。